

Title	<施設紹介> 弘前大学資料館(Hirosaki University Museum)の紹介と今後の展望
Author(s)	石山, 晃子
Citation	弘前大学國史研究. 135, 2013, p.42-46
Issue Date	2013-10-30
URL	http://hdl.handle.net/10129/5990
Rights	
Text version	publ isher



<http://repository.ul.hirosaki-u.ac.jp/dspace/>

〔施設紹介〕

弘前大学資料館 (Hirosaki University Museum) の

紹介と今後の展望

石山 晃子

はじめに

二〇一二年十月二十六日、弘前大学文京町地区キャンパス内に「弘前大学 過去から未来へ」をコンセプトとした弘前大学資料館（以下「資料館」とする）が開館した。官立弘前高等学校、青森師範学校、青森医学専門学校などの弘前大学の前身各校の歴史をはじめ、新制大学となつてからの約六十年間の歩み、各学部・研究科の歴史や研究成果を一堂に紹介する、大学博物館 (University Museum) の誕生である。

本稿では、資料館の概要や活動内容について紹介するとともに、課題や今後の展望についてもふれてみたい。

一 弘前大学資料館の位置付けと大学博物館の役割

「弘前大学資料館規程」(二〇一二年六月二十二日規程第八十六号) 第二条によれば、資料館の目的は、弘前大学における歴史的、博物的、学術的資料を展示、保存及び整理し、教育研究及び学習活動に資すると

ともに、地域社会の教育文化の発展に寄与すること、と規定される。また、資料の展示、保存、整理、調査、収集及び利用に関することがおもな業務である(同規程第三条)。つまり資料館は、社会教育施設である博物館と同様の機能をもつ施設として位置づけられていることがうかがえる。学内に資料館を設置することによって、学校教育と社会教育の相互連携の推進をはかり、その相乗効果による研究と教育の発展を志向しているものと理解される。

二〇〇四年に実施した守重伸郎氏による調査(守重伸郎「わが国の大学博物館の問題点とその背景」『日本大学大学院総合社会情報研究紀要』No.8 二〇〇七年)によれば、全国の大学博物館数は二百二十館を数えるという。東北地方に存在するおもな大学博物館としては、岩手県では岩手大学ミュージアム、宮城県では東北大学総合学術博物館、秋田県では秋田大学大学院工学資源学研究所附属鉱業博物館、山形県では山形大学附属博物館などがある。今回の資料館の開館は、青森県における待望の大学博物館の誕生といえよう。

近年、大学ないし大学博物館が求められる生涯学習社会への対応は比重を増している。一九九六年一月、文部省学術審議会学術情報資料分科会において「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について―学術標本の収集、保存・活用体制の在り方について―(報告)」が取りまとめられた。これによれば、大学等における学術研究活動により収集された動植物、化石等の学術標本を整理・保存、展示・公開するとともに、これらの学術標本を対象に組織的に独自の研究・教育を行うこと。さらに「社会に開かれた大学」の窓口として展示や講演会等を通じて、人々の

様々な学習ニーズにこたえることができる施設として、ユニバーシティ・ミュージアムの設置が提言されたのであった。

また、二〇〇九年に公布された「博物館法施行規則の一部を改正する省令」により、「地域文化の中核的拠点」としての博物館を支える学芸員が、人々の生涯学習の支援を含め博物館に期待されている諸機能を強化し、高い専門性と実践力を備えた質の高い人材として育成されるよう、大学等における学芸員養成課程における養成科目の改善・充実が図られた。これにより、大学における博物館に関する科目および単位は、八科目十二単位から九科目十九単位へと改正されている。「博物館ガイドライン」(文部科学省 二〇〇九年四月)では、学内実習は二単位相当以上(延べ六十時間から九十時間以上)実施すること、学内実習のための施設・設備・備品を確保すること、学内の附属博物館等を活用することが望ましいとしている。

資料館においても「資料館は博物館実習など学生の教育に活用する」(二〇一二年九月二十日報道発表)ことが当初から意図されており、館内には、博物館実習や実地研修・研究などの作業を行うことを想定した実習室と作業室が整備されている。資料館は大学とともに、学芸員をはじめとする生涯学習社会に対応しうる人材の育成についても、少なからぬ役割を担うことが期待されているのである。

二 弘前大学資料館の展示概要と活動

資料館の五百六十平方メートルのスペースのうち、常設展示には大き



「前身各校の歩み」の展示コーナー

く七つのコーナーが設けられ約七百八十点が展示される。エントランスから入って最初の導入部には、①「前身各校の歩み」および②「弘前大学の歴史」のコーナーがある。この展示を見学することによって、弘前大学創立以前と創立後の歴史を概観することができる内容となっている。官立弘前高等学校、青森県師範学校、青森師範学校と、弘前大学は、連続した高等教育、専門教育の流れを引き継いでいることがあらためて感じられる構成である。とくに官立弘前高等学校に入学した太宰治の自

筆ノート(「修身」
「英語」)が象徴的に展示されているのは、多くの観覧者が注目するところであろう。

さらに、前身各校の業績や精神を受け継いだ弘前大学六十年の沿革を、歴代学長の紹介やキャンパスの変遷などで確認していくことで、その歴史の重みを感じられると思う。とくに在生をはじめと

する大学関係者や卒業生は、是非とも見学しておかねばならない内容だ。このコーナーには、弘前大学附属図書館が所蔵する「弘前八幡宮社務日記」（天明四年（一七八四））などの史料も展示される。通常は公開されていない貴重資料を、大学関係者だけではなく一般の人々も見学できるという点も、資料館の魅力づくりに結びついているのではなからうか。

展示室を進んでいくと③「郷土資料と津軽学」コーナーである。同附属図書館が所蔵する「津軽領元禄国絵図写」のパネル展示のほか、民俗・考古の共同研究の成果や、津軽にちなんだテーマに基づいた論考を収録した地域誌『津軽学』（津軽に学ぶ会発行）が展示される。

④「環境と未来への研究」コーナーでは、白神山地研究や新エネルギー研究、地域共同研究など、一般の人々にとつてのより身近な問題ともいえる「環境と未来」の研究成果をテーマとする。豊富な写真や標本資料は、利用者の的好奇心を満足させるものである。

⑤「津軽の華」コーナーでは、弘前大学ねぶたについて、実物のねぶた絵を展示するほか、ねぶた運行の様子を3D映像を用いて紹介することで、観覧者がねぶたを体感できるよう工夫される。

⑥「先人の業績」コーナーでは、第二代学長の郡場寛こむらばかん氏をはじめ、顕著な業績を残した弘前大学の教員や卒業生がゆかりの品とともに紹介される。

⑦「各部局展示室」では、人文学部、教育学部、大学院医学研究科、大学院保健学研究科、大学院理工学研究科、農学生命科学部の六つの部局について、それぞれの沿革や研究成果、今後の取り組みなどが紹介される。大学院医学研究科の「解剖学教育掛図」にみるように、各部局で

それぞれに保管されてきた貴重な資料が、資料館を通して公開されることは、新たな研究材料の提供や学習機会の充実に資するものと高く評価されよう。

資料館には、以上の常設展示スペースのほかに企画展示室が設けられており、常設展示のほかにさまざまな企画展の開催が当初から期待されていた。開館以来第一回の企画展は、二〇一三年五月十六日から八月八日にかけて、弘前大学大学院理工学研究科附属地震火山観測所および同理工学部地球環境学科（地震学・地震工学研究グループ）が主催した「あの地震からX年―記録された地震から学ぶ―」である。東日本大震災から三年目を迎えた今年、一九二三年の関東大震災から九十年、一九六八年十勝沖地震から四十五年、一九八三年日本海中部地震から三十年という節目の年にあたる。時間の経過とともに薄れがちな防災意識や防災力を高めようと、これらの地震と災害がいかにして記録されてきたのかを紹介するものである。

おもな展示資料は、①関東地震・日本海中部地震・東北地方太平洋沖地震の波形記録、②東北地方太平洋沖地震の波形の三次元模型、③東北地方太平洋沖地震発生直後と一年後・二年後の地面の動きの早送り表示、④日本海中部地震の被害写真が撮られた地点のGoogle Earth 上での表示などである。とくに④については、確認したい場所の被害写真について自身がパソコンを操作して閲覧する手法であることから、見学者の展示への積極的参加に奏功すると考えられる。会場では防災ハンドブックなども配布され、地域住民の防災意識の向上につながるものと感じた。

このように、資料館の企画展運営は資料館が独自におこなうのではな

く、学内の各部局などが自主的に企画立案し、資料館に申し込んだ上で開催する方法が採られている。この運営方法によれば、より専門的な学術研究成果と豊富な学術資料にもとづいた展示が構成されることになる。このことは、学生への教育はもちろんのこと、地域住民の生涯学習について充実した機会を提供してくれるものといえよう。

三 弘前大学資料館への期待・課題など

まず展示内容については、資料館のコンセプトである「弘前大学 過去から未来へ」に合致しており、このことは資料館および弘前大学の存在を広く周知するのに奏功すると考えられる。まずは、県内外に居住する弘前大学の卒業生や関係者が積極的に見学し、弘前大学に対する誇りと愛着をもつことによって、郷土そのものを広くアピールすることに役立つのではないかと期待される。とくに中学生や高校生に対して、資料館の見学を通して、大学における教育や研究の意義を事前に学習してもらうような広報活動を推進していくことが、キャリア教育の一環として大変有効であると思う。

映像展示やハンズオン（体験・参加型）展示が、各コーナーに導入されていることは注目されるが、その最たるものは、⑤「津軽の華」コーナーにおいて、弘前大学ねぶたの歩みを3D映像で紹介するものだろう。弘前大学とねぶたの関わりを、県外からの旅行者や観光客などに対しても積極的にPRしたいところだ。

各部局の研究を紹介する展示ブースには、それぞれデジタルパネルが

設置されており、豊富な情報をビジュアルに知ることが可能である。最新情報への随時更新やリアルタイムでの情報発信などが充実すれば、利用者がより関心を寄せることが見込まれる。

このほか、常設展示の展示替えやミニニューアルなども計画されているとのことであるから期待したい。

刊行物に関して、常設展示についての展示図録が作成され、展示資料を確認しながら展示を見学できるように工夫されているのは、利用者に対して親切な対応である。企画展についても、写真や図版などを豊富に盛り込んだ展示図録や、その展示資料に関する個別の展示解説シートなどがあれば、利用者の学習の便が図られるのではないだろうか。

学習活動に関して、常設展示をはじめとして企画展などを見学する利用者が、その内容をさらに深く理解できるよう、関連する講座や講演会、ギャラリートーク、ワークショップなどの開催についてできる限り多くの機会を設け、学習を支援することが必要と考えられる。

施設の利用に関して、現在、資料館の開館時間は午前10時から午後4時まで、休館日は土曜・日曜・祝日・休日・盆期間・年末年始である。ニーズをふまえた上で、開館日や開館時間などの拡充についても検討していただきたい。

おわりにかえて

今後資料館においては、豊富な資料とその独自性を基盤として、多彩な活動が展開されることと思う。博物館の現場にいる筆者の立場からは、

今後の資料館の活動展開において、博物館をはじめとする他の社会教育施設との連携や交流も視野に入れていただくことを要望したい。そのような機会は、まずもって博物館などにおける調査研究のスキルアップを促し、その研究に裏付けされた展示や教育普及活動が、知的関心の高い学習者のニーズを満足させるのに役立つものと考えるからである。

二〇一二年十月のオープン以来二〇一三年七月までに、資料館はすでに二千九百七十八名の入館者を迎えている。資料館は、弘前大学における高度な学術研究の成果を広く提供する場として、学内のみならず学外からも注目されている。地域社会が求める豊富な学術情報が資料館という窓口を通じて地域に還元され、さまざまな分野において活かされることを期待している。

〔弘前大学資料館〕

所在地 〒〇三六―八五六〇

青森県弘前市文京町一（弘前大学文京地区キャンパス内）

TEL 〇一七二―三九―三四三二

ホームページ <http://shiryokan.hirosaki-u.ac.jp/>

（いしやま・あきこ みちのく北方漁船博物館学芸員）